

## 第二百二十三話 楽園転じて悲劇の島々へ

対米戦略上の要求からか、中国がミクロネシアに触手を伸ばしている。戦前の日本も対米戦略上この地域に強い関心を持っていた。が、天の時も、地の利も活かせなかった。

- 1 南洋群島とは、日本が国際連盟によって委任統治を託された西太平洋の赤道付近に広がるミクロネシアの島々を指す。現在の北マリアナ諸島・パラオ・マーシャル諸島・ミクロネシア連邦に相当する地域である。南洋諸島、内南洋とも云う。



(関連メモランダム 49、116、190、203 等)

### 2 日本の委任統治

日本は、第一次世界大戦後のパリ講和会議で独領であった南洋群島の領有を主張したが米の反対で認められず、C区分（非文明地相当）の委任統治受任国となった。事実上の植民地とはいえ、**委任統治には、非軍事化**という制約があった。

1922（大正11）年2月11日に、委任権が発効し、同年3月に日本政府は総理府の下に「南洋庁」をパラオのコロール島（本庁）に設置し、第一次世界大戦後引き続き軍政を行っていた海軍（臨時南洋群島防備隊）から施政を受け継いだ。邦人人口は約10万人と島民の倍近くまで増大した。北の満鉄、南の南興（南洋興発株式会社）と呼ばれる国策企業の下、日本化・親日化が進み、楽園ともなった。

### 3 南洋群島の戦略的価値

米国は、この時期、日本の南洋群島プレゼンスに危機感（「太平洋上の巨大な熱帯蜘蛛の巣」）を覚え、海兵隊の育成に力を注いだ。日本側は、南洋群島の島々は、あくまで航空機や艦船の進攻用基地であり、要塞化する発想はなかった。非軍事化という縛りがあったとは云え、重要性の認識が希薄だったのではないだろうか？日本の国際連盟脱退後も委任統治の形式が継続したので、あからさまな軍事施設建設は控えられた。ただ、海軍としては、有事の際は軍用に転用できるよう港湾施設の整備を進めた。

### 4 南洋群島の軍事基地化の努力

ル米大統領は、非軍事化を狙って太平洋諸島中立化を提唱している。一方、南洋群島の軍事基地化を望む海軍は、群島が独から譲渡された形になれば、軍事基地化が可能であるとし、日独伊三国同盟締結（1940/9/27）と同時に譲渡書簡が交換された。太平洋のジブラルタルとも呼ばれるトラック島や重要島嶼の軍事基地化（港湾、飛行場）が進展するのは日米戦開戦後であった。陸軍の大部隊が配備されることもなく、軍事要塞化は望むべくもなかった。

### 5 南洋群島の失陥

米軍は、ガ島攻略後ソロモン諸島を北上するミニッツとニューギニアを比方向に攻めるマッカーサーの二正面攻勢作戦を採った。日本に占領された英領ギルバート諸島を攻略（1943/11～）後は、米軍は「飛び石作戦」で、8つの島（クェゼリン、マリアナ諸島（サイパン、グアム、テニアン）、パラオ諸島（ペリリュー、アンガウル）等）を攻略、17の島は置き去りにされた。11万の日本軍将兵が玉砕し、未攻略島嶼残留16万の将兵のうち4万人が餓死したとも。

### 6 悲劇の島々の因たるものは？

漸減邀撃作戦における南洋群島の価値認識と作戦準備の推進の不符号・不一致

海軍の艦艇や航空機の消耗により反撃・邀撃戦力不足、

陸軍戦力の不在または転用遅れ等が考えられるが、日本が生真面目すぎて作戦準備着手に躊躇ったのが大きいのか。